

## シューベルト作曲「菩提樹」に寄せて

藤原 道夫

「菩提樹」は、ドイツ歌曲の中で、いやすべての外国の歌のなかで、日本において最もよくうたわれている曲の一つだろう。手元にある『愛唱名歌集』（野ばら社）にもこの曲が載っており、歌詞は近藤朔風作となっている。「泉に添いて 茂る菩提樹・・・」と始まる歌詞は、誰しも知っているに違いない。これは訳ではなく作となっているように、ドイツ語の原詩をなぞってはいるものの、日本語としてうたい易いように作られていて、むしろ日本の歌として親しまれているように思える。女声合唱団によって「・・・ここに幸あり」とうたわれれば、うたっている方はもとより、聞く方もほのぼのとした幸せ感を抱くことだろう。このことに異を唱えるつもりはない。ただ、「菩提樹」のドイツ語の原詩を調べ、それが一連の詩の一部であることを知ると、近藤作は「ちょっと違うな」と思うところが出てくる。

「菩提樹」は、W. ミュラーによる 24 篇の詩からなる「冬の旅」の中の 5 番目に当たる。一連の詩に、失恋した若者が放浪の旅に出て当てもなくさ迷っている際の心象風景がうたわれている。シューベルトが死の一年前に「冬の旅」の前半 12 篇に、続いて後半 12 篇、計 24 篇の詩に曲をつけた。それらのなかで、第 5 番目の「菩提樹」はとりわけよく知られているようだ。

原詩の出だしを直訳すると、「(城壁の) 門の前にある泉のそばに 一本の菩提樹が立っている」となる。ここから、ヨーロッパ中世期に形成された城壁に囲まれている小都市が思い浮かぶ。城壁には門があり、脇に見張りの塔が建っている。門のあたりに湧いている泉は住人にとって貴重な水資源だった。泉のそばに一本の菩提樹が立っていて、木陰をつくっている。その樹には自由の象徴という意味合いが込められている。歌曲「菩提樹」には、このような背景があることを心に留めておきたい。

日本語の歌詞で違和感を覚えるのは、2 番に出てくる「此処に幸あり」とうたわれるところ。原詩では「あなた (du) はここに自分の (Ruhe) 安らぎを見出すでしょう」となる。悩める青年が菩提樹の木陰に休んで感じるのは、「幸せ」ではなく「心の安らぎ」なのだ。この句は 3 番の最後に二度うたわれる。ここにも問題がある。安らぎを見出す動詞 finden の使われ方をみると、2 番では現在形、3 番の最後では仮定のことを表現するために接続法Ⅱが用いられている。3 番になると、若者は菩提樹の立っているところから遠く離れてしまっている。彼は菩提樹の葉のざわめきを思い出し、「あなたはここで安らぎを見いだせるかもしれないのに」とささやきかけられているかのような幻聴を覚える。この呼びかけは、親しい間柄

に用いられる du で表されることにも注目したい。ドイツ語で歌う歌手は、finden の変化を発音上はもとより情緒面でもそれらしく、しかも親しみを込めて表現することが要求される。近藤作の歌詞にはこのような表現上の使い分けはなく、2 番も 3 番も一律に「此処に幸あり」となっている。

「菩提樹」の音楽面に触れると、この曲は木長調で書かれている。ただ 2 番の後半で、若者が冷たい風を受けて帽子が飛ばされてしまう場面では、ナチュラル（本位記号）♩が多用されて暗く不安定な調性になる。ここから 3 番に入ると木長調に戻り、歌は明るい調子を取り戻す。その際の音楽の変化が、実に見事だ。

最後に「冬の旅」全体にかかわることを追加しておきたい。全 24 篇の詩につけられている音楽は短調が多く、全体的に暗い雰囲気が出ている。前半 12 曲の中では、長調は第 5 曲「菩提樹」と第 11 曲イ長調の「春の夢」のみである。それゆえに明るい長調の「菩提樹」が目立ってくる。個人的には第 1 曲二短調の「お休み」、第 11 曲「春の夢」そして最後の第 24 曲口短調→イ短調の「辻音楽師」が好きだ。特に最後の悲惨ともいえる曲は、歌も伴奏もすばらしい。若者はこの辻音楽師に出あってどう感じたのだろうか、説明がないままに「冬の旅」は終わる。シューベルトが詩「冬の旅」をどう解釈しながら作曲したのか、自らの人生を辻音楽師の姿に照らしてみたのではないだろうか。このことについてさまざまに憶測できるのだが、実証的なことは研究者に委ねよう。

「冬の旅」はドイツ歌曲のなかでも最高傑作に入るといわれる。これは一連の歌曲につけられているピアノの伴奏曲のすばらしさにもよるのではないか、と思う。（これは十代で気付いていた）このことはすでに「辻音楽師」に関連して触れた。伴奏者は歌手の表現力をしっかり支えることができる力量のあるピアニストが望ましい。何度か「冬の旅」を実演で聴いてこのことを実感し、ピアノの音楽もじっくり鑑賞した。この稿で取りあげた「菩提樹」でも、日本語でうたわれようとドイツ語でうたわれようと、歌とともにピアノ伴奏の音楽も楽しみたいものである。